

英語教育

ENGLISH CLASSWORK

Vol.63 No.2 2011

主幹 佐野 正之

巻頭言

外国語活動から高校英語へバトンをつないで

筑波大学大学院教授 ● 卯城 祐司

4月からいよいよ小学校の外国語活動が完全実施となります。平成19年12月の時点で、全国の公立小学校の97.1%で何らかの英語活動が実施されていますから(「小学校英語活動実施状況調査」)、すでにその影響が中学校でも生徒たちに現れているかもしれません。

外国語活動では、いわゆる「コミュニケーション能力の素地」を育てることが目標で、極端な言い方をすれば英語を教えるわけではありません。その時間に出てきた単語や表現を次の時間に忘れてしまっても構わないのです。定着させるためのパターンプラクティスなども行いません。ですから、中学校1年生の4月に、「どれどれ、外国語活動でどれだけ英語ができるようになってきているかな」とテストをしたり、「外国語活動でさっぱり英語が身についていない」と批判をするのは間違っています。

外国語活動では、子どもたちのことを一番熟知している学級担任が、「こんな活動ならできるだろう」「こういうやりとりなら楽しいだろう」と、子どもたちが思わず身を乗り出したくなる活動や、子どもたち同士で尋ねたくなるような情報のやりとりをするコミュニケーション活動に英語を載せていきます。そういう活動だからこそ、道案内でもお買い物でも英語のやりとりが成立するわけです。このような場面設定の努力がないところでテストをしても、子どもたちから英語は出てきません。

外国語活動で音声面での英語の慣れ親しみはあるものの、中学校の英語では、いきなりこれまでの1年生2学期レベルから始めるようなことは期待せず、外国語活動の成果をできるだけ受け止めて、その「素地」がさらに深まるように努めたいものです。また、音声に慣れ親しんだ子どもたちには、今以上に文字の導入も慎重でなければなりませんし、体験活動から座学への橋渡しも丁寧に進めなければなりません。そして、外国語活動で高まった興味・関心を発揮させることができるような中学校英語の授業作りを目指したいものです。中学校英語は、小学校の外国語活動から、いよいよ英語で進める高校の英語へとしっかりバトンを渡す大事なリレー走者なのです。

座談会

「新しい学習指導要領での英語教育・教科書」

参加者：新里 眞男(東京国際大学教授)
 久保野 雅史(神奈川大学准教授)
 北原 延晃(東京都港区立赤坂中学校教諭)
 中嶋 洋一(関西外国語大学教授)
 司会：開隆堂編集部

新指導要領と英語の授業

司会 平成24年度から中学校の新しい学習指導要領が実施され、教科書も新しくなります。週3時間から4時間になるとか、4技能をまんべんなくとか、書ける力が低いとか、生徒の学力が変わっているとか、いろいろな話が出ています。また、平成23年度からは小学校英語が本格的に導入されるとか、いろいろと様子が変わってきています。

そこで、これらの状況に応じて、平成24年度以降の新しい学習指導要領の中での中学校の英語教育はどのように変わっていったらいいのだろうかというような、大きな話から始めていただければと思います。

新里 現行の学習指導要領ができたときは、「ゆとり教育」の時代でした。英語は完全に週3時間体制になり、プラスアルファがなくなりましたね。さらに「ゆとり」を生むために、教える内容を以前の7割にしると言われたんです。

中学校で教える文法項目を3割も減らすわけにはいきませんね。例えば3年次に学習する現在完了形や関係代名詞がなくなったら、英語という言語を教えることではなくなってしまいます。それで、「聞くこと」と「話すこと」、つまり、音声重視ということにしたんです。「読むこと」と「書くこと」については到達度が今までよりは低くなって仕方がない、バランスが欠けてもいいというスタンスになったわけです。

しかし結局、「読むこと」、「書くこと」の技能が、教育課程実施状況調査の結果、身につけていないということが分かったわけです。ある意味で当然のことだったんですが…。特に、長文の理解度が低いとか、「書くこと」に対する抵抗があって、点数が低いという結果に如実に影響が見られたわけです。

その後、全体的に日本の大学生の学力が低いということで、もっと基礎、基本を徹底して教えなければならないという「学力問題」が大々的に指摘されたわけです。

それと同時に、小学校で英語活動が進み、英語の音声的な練習をしたり、ネイティブスピーカーの英語に触れると

いうことが、かなり行われるようになってきました。このため、「聞くこと」、「話すこと」の音声英語はかなりカバーされてきているので、もう音声英語だけを重視するという必要なくなったというわけです。それで、それまでの学習指導要領では「読むこと」や「書くこと」が全く軽んじられていたかのように、4技能の統合的な活用とか、総合的な指導ということが重要だということに変わったわけなんです。

今年の4月、つまり平成23年度から小学校の「外国語活動(英語を原則とする)」が5、6年で必修化されました。中学校の外国語も週3時間から4時間になり、高校も「コミュニケーション英語Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅱ」「コミュニケーション英語Ⅲ」という名称の科目ができたわけです。このことからわかるように、文部科学省は、英語教育の改善・発展のために不転の決意を抱いていることは確かです。

司会 新学習指導要領の最大のポイントは何でしょうか。
 新里 新しい中学校の学習指導要領の考え方で一番重要なのは、やはり、「4技能の統合的な活用」とか、「4技能の総合的な指導」ということだと思います。ところが、学習指導要領そのものには、何をどうやるのが総合的な指導なのかとか、4技能を統合的に使うというのはどういうことなのかは、直接書いていないと思われれます。したがってなかなかイメージをつかむことは難しいでしょうね。

ひとつだけ、分かりやすい例があります。それは、今回の学習指導要領で新しく入ってきた「スピーチ」です。これは、基本的には4技能の統合的な活動になりやすいものなので、これから出版される各教科書で「スピーチ」がど

のように扱われているか、本当に統合的な活動になっているのかどうかが、その教科書の試金石になると思います。

北原 スピーチが統合的な活動なんですか。
 新里 その格好のサンプルになっています。

北原 現状で?

新里 現状で「スピーチ」が統合的な活動として行われているということではなく、今度の新しい学習指導要領では、「スピーチ」が統合的な扱いができる活動として必ず授業で取り上げるようになっていっているので、本当に4技能の統合的な活動になるような書き方になっているかどうか、それぞれの教科書の試金石になると思っています。

北原 先生が今お考えの、現状でのスピーチというのは、統合的にはなっていないのですか。

新里 「スピーチ」というのは、基本的に人前でスピーチをするということですが、実際にはスピーチをする前に、例えば、どんなことを言うか、つまり、内容を考えます。内容を豊かにするためにはいろいろな情報を仕入れる必要があります。そのためには英語を聞いたり、読んだりすることが必要なわけです。

それから、日本人の子どもにとっては、スピーチの準備として、あらかじめ原稿を書くことが必要になる。ここで、「書くこと」も行うわけです。そして、その原稿をもとに何度も発表の練習をし、最終的には人前でスピーチとして発表する。ここで、「話すこと」が絡んできます。以上で4技能は統合的に使われていますが、さらに他の生徒のスピーチに対して、今のスピーチの内容はどうだったとか、今の発表の仕方はどうだったということで、英語で簡単に感想を言わせることができます。その感想を、また、書かせることもできる。書かれた感想を集めて、みんなで読んでみれば、さらに「読むこと」の活動ができます。このような形で、いくらでもスピーチを中心にして、「4技能の総合的な指導」ができる可能性があると思っています。

北原 統合的というのは、何か1時間の中で、読んだものについて書かせたり、聞いたものについて書かせたりする、しゃべらせたりとかいう感じがするんですが。1時間の中



北原延晃先生



新里眞男先生

で1つの技能ばかりやってはいけないというような考え方になってくるのかなと思っています。

新里 1時間ということにはこだわる必要はないと思います。

北原 そういう解釈が今までもあったと思いますが。

久保野 「聞く・話す・読む・書く」活動を、すべてバランスよく、毎時間行うことは難しいし、そんな必要もないと思います。ただし、二つの技能が統合的に使われる場面は想定できます。

「総合的な指導」や「4技能の統合」というコンセプトは、中央教育審議会(中教審)の答申に書かれていたことの反映ですよ。スピーキングについては、新里先生が発言されたので、別の技能について考えてみましょう。従来の授業、特に高校の授業では、リスニングの場合は問題を解くだけ、リーディングの場合は日本語に訳して意味を確認するだけでよしとされることが少なくありませんでした。こういった風潮に対して「それだけではダメだ」というメッセージを発信しているのだと思います。

理解した内容に関して、自分の言葉で何かを発信する。それを、日本語でなく「英語で」行わせよう、ということなのではないでしょうか。

中嶋 活動を統合的にするには、生徒同士を関らせることが大事です。授業でも、そのような活動を取り入れなければならぬでしょうね。スピーチ活動では、今までの教科書でも、大体、タスクとして、2時間ぐらいいは、かけていたのではないかと思います。

つまり、スピーチの最後の発表のところに行くまでに、まず、使える表現を確認したり、モデルとなるスピーチ原稿の下線を引いた部分だけを自分に当てはまるように書き換えてみたり、書いたスピーチ原稿を互いに読みあったりする、というようにいくつかの技能が繋がって初めて可能になっていたはずなんです。ただ、どちらかと言うと、直線的で、原稿を書いて順に発表する、というものが主で、途中で練り上げる部分、Q & Aやレポートのように、最後に関わり合う部分あまり意識されていなかったように思いますね。

司会 そうすると、教科書でもスピーチ活動に行くまでに、他の3技能が統合的にセットされていることが必要ですね。

北原 我々が編集した教科書では、いくつかの課を学習した後で、**それまで積み上げてきたことを使って活動をする教材として My Project が設定してあります**よね。そこでは、自己紹介なら自己紹介のモデル文をまず聞きます。次にスクリプトを見て読んでみましょう、となる。そして、

モデル文の構成を考えながら、それをちょっと書いてみよう、そして既習事項の中から自己紹介に使える文を探して書き出して、それを使って自分の自己紹介スピーチの原稿を書くところまでいきます。そして最後にスピーチをやりまします。これもまさに4技能を総合的に指導、学習できる教科書とも言えるし、4技能が統合されている教科書とも言えると思います。

中嶋 そのこのところは、強く伝えた方がいいと思います。ただ、統合とか総合とか言っても、形だけつなげようとしても、個別技能そのものがしっかりとできるように指導されなかったら、絵に描いた餅です。

例えば、英語らしい発音ができるように指導しなかったら、聞き取れるようにはならないですね。ジグソーパズルの最後の絵に行くためには、どんな力が必要とされるのかを、まず教師自身が認識しておかなければならない。何のための活動か、どこにつながるのかを考え、土台作りから地道にやっていって、はじめて統合的な活動ができるのであって、そういう発想が現場にないと、生徒にとって意味のある活動にするのは難しいと思いますよ。

■ スモールステップで

新里 2つ以上の技能を統合的に活用する活動にしても、4技能の総合的な活動にしても、基本的に、ステップを考えてやらないといけないと思います。

例えば、スピーチをするといっても、子どもたちのスピーチ力を伸ばすためには、スピーチという活動にはどういう要素があり、それらの要素をどのように育成していくかが大切になりますね。さきほど中嶋先生が言われたように、スピーチ活動をするためには、音声指導も必要です。その他にどんな要素が必要なのか、それらを指導するためにはどれだけの時間が必要なのかを考えなくてはならない。これは、タイム・オン・タスクで、やるべきタスクにどれだけの時間がかかるかという発想で考えるわけです。

そうすると、今まで学習した言語材料の復習もある程度しないとスピーチで使えない。それから、スピーチをするには、スピーチという話し方のフォーマットもある程度知らないとだめなので、スピーチを見たり、聞かせる活動もある程度したい。それから、生徒たちに自分なりの考えを生み出させるために、マッピングという活動もしてあげないといけない。そうでないと、先生の押しつけのスピーチになってしまう。これらのこと全てを考慮して、小さなステップでスピーチ活動が行えるように、我々は新しい

*Sunshine*のスピーチ指導の型を作ってきたつもりです。

中嶋 ある単元にスピーチがあるからといって、そこだけでのスピーチ指導で終わっていたら、もったいないですよ。スピーチとは、自分の考えをある程度まとめて、相手に伝わるように表現することです。

だとしたら、1年生のときから、まとまったことを表現する力をどうやって育てていくかを考える必要がありますね。

例えば、いろいろな都道府県の公立高校入試の英作文の問題で35～40語で書きなさいという問題があります。それは、入試前になってから練習してもだめなんですよ。1年生のときから、まとまった内容で30語ぐらいを書かせ、どうやってつなげるかという指導をしていかないといけないと思います。そういったデザイン力が、授業の生命線であって、まさにこれからの授業にはそれが必要になってくると思います。

久保野 団塊世代の退職に伴って、今後は若い先生の数が増えていきますよね。経験の浅い先生たちにとっては、授業デザイン力を育ててくれるような教科書というのは、非常に魅力的だし、使いやすいと思います。1年の教科書でも、各プログラム、各セクションの段階から少しずつライティングのタスクがあります。それらが量的にも質的にも徐々に積み上げられて、**学期末手前の統合的な言語活動のページ My Project**につながっていく。そしてさらに学年最後の到達点にもつながっていく。そんなイメージですよ。それが2年の教科書へ引き継がれ、最終的には3年の最後の到達目標にもつながっている。教科書を順に進めて、タスクに取り組んでいくことを通して、無理なく力を伸ばしていくことができる。これが今回の教科書の最も大きな特長ではないでしょうか。

北原 東京のような大都市には若い先生が増えてきて、これからは地方にもそれが波及していくわけだから、今、久保野先生が言われたように、ある程度誘導型の教科書も求められる時期になっているんじゃないかと思います。

中嶋 実際、そういう必要があると思いますね。

久保野 教科書を使いながら、逆算的に授業設計のコツをつかむことができる。そうして、長期的な見通しを持って授業と授業をつなげていき、生徒達は創造的な課題に取り組んでいくための学習方法を身につけていくことができる。教科書には、ある意味でこのように啓蒙的な役割もあるように思います。

北原 自分が若かったころを思い出すと、教科書だけ見ても、どうやって教えたらいいかわからなかったですよ。

■ 経験の浅い先生も安心して使える教科書

新里 もうひとつは、学校の今の組織とか社会状況を見てみると、北原先生が研究部長をされている東京都中英研究部や自主研究会「北研」のような組織があって、先輩の指導技術とか、指導の考え方が若い先生方に伝わるようになっていけばいいけれども、中学校の先生方は校務分掌などでいつも超多忙状態ですね。また、多くの先生が車で通勤していて、先生方同士の「アフターファイブ」の交流も少なくなっている中で、新任以来ずっと自己流で授業している、という実態がかなりある。音読のさせ方も知らない、簡単な授業のテクニックも知らないということがかなりある。それでも、若い先生方は英語を話したりする能力は高く、何とか自信があり、授業にもそれなりに満足しているので、指導に必要な技術はあえて吸収しようとしなくていいですよ。

それが現実であるとする、教科書に書いてあることをベタツとなぞるような授業をしていてもある程度の指導ができるようにしないと、その先生の成長のためにも、生徒にとっても不幸なことになる。なるべく先生方が迷わず、生徒にとっても大きな負担にならないような、スモールステップをきちんと用意した教科書が必要だと思います。我々の新しい教科書では、それはできていますと思いますが…

司会 教科書を作る過程で、モニタリングといいますか、部分的に案を見てもらって、現場の先生方にご意見を伺うこともありました。親切すぎるのではないかとのご意見もありました。

久保野 確かに、経験豊富な先生たちにとっては、細かな指導ステップにまで言及し過ぎていのように感じられるかもしれません。そのような先生は「自分の授業には不要だ」と感じる箇所はスキップしたりして、教科書をカスタマイズしていただければよいですよ。先ほどもお話ししたように、経験の浅い先生たちに学期末や学年末の言語活動に向かって、日々の授業でスモールステップを積み重ねていってほしい。そのための手順を教科書に盛り込んだつもりです。



久保野雅史先生

■ 自学・自習を促す教科書

北原 それと、生徒が自立(自覚)できるようにしないと身につかないので、自立できるような教科書作りが必要だと思っています。そのためには、レファレンス的に使えるようになっている必要があるわけです。生徒は4月に教科書をもって、ほかの教科はどんどん読めるのですが、英語は教えてもらわないとわからない。どうやっていいかわからないわけです。

久保野 本文テキストの意味が日本語で書かれているわけではないですね。私自身が、中学入学時に戸惑ったのを記憶しています。

司会 教科書の上で自学自習のための工夫はどのようになされているとよいのでしょうか。

中嶋 教師の仕事は、発問と指示と説明です。その中でも、特に指示を明確にすることが大切のように思います。活動をさせながら指示を出したり、指示を何度も出しなおしたり、場当たりの指示が、生徒たちを混乱させているように思います。

もし、教科書のあちこちに、今やっていることは何ページにつながっています、とか、何ページに戻って確認してみましょう、といったヒントが書いてあれば、混乱は避けられますね。さらに、開隆堂のWebマガジンでも書いたのですが、すでに習ったページに戻って、本文の内容を膨らませることもできるわけです。

自学自習を促進するためには、学び方や考え方の型を身につけさせることが大事のように思います。ですから、教科書を先に進めるのではなく、ページをあれこれめくる作業を通して、ああ、そうかと気づかせることがその鍵になるように思います。

新里 この表現は以前ここで習っていたんだとか、ここでは、あそこで学習した表現を使えばいいんだということを生徒に自然に気づかせるということですね。

久保野 習っただけ、理解しただけでは身につくはずがありません。スポーツや楽器を身につけるのと同じですよ。



中嶋洋一先生

間違えながら何度も何度も取り組むことによって、初めて使えるようになるのです。

教科書を何度も読み直す機会を作るための仕掛けが、学期末手前にある発展的な活動のページ **My Project** です。ここでは、活動に使う英語表現をどこで学習したのか、参照して読み直せるように、初出箇所のページが分かりやすく書いてありますので、言語活動の中でつまづいた場合にも「これは、どこで習ったんだっけ？」などと悩む必要がなくなるのです。

スパイラルに復習していく方法を示しているということでもあります。困ったときには、教科書を読み直せばヒントや答えが見つかる。そんな気持ちで、何度も必要なところを復習できるような気持ちに生徒達になってくれることを願っています。

新里 レファレンス性はいいですね。一般論的に言うとうなるんですか。子どもたちにとって、自学・自習がしやすくなるということですよ。

中嶋 それは北原先生が一貫して主張してきたことですね。

北原 生徒たちに3年間の本を1冊にまとめて、持ってこさせたりするんですが、それを嫌がるんですよ、重いと言って。英語だけじゃないので、カバンが重くなる。そのために、カバンをなるべく軽くしましょうというキャンペーンを張っていたぐらいです。

1, 2年の教科書なんか、家に置いていても見ないのだから、学校に置いてもいいと言っているんです。持ってこない生徒もいるんですが、このように、「何ページに書いてあるぞ」となっていたら、英語の苦手な子ほど持ってくるんですよ。

教科書における4技能の総合・統合

司会 先ほど、4技能の総合的な指導、統合的な活動というお話が出ていましたが、それが教科書の中でどう組み込まれているのがよいのか、そのあたりをもう少しお話しただけですか。

新里 「4技能の総合的な育成」のためには、例えば今度のわれわれの教科書のように各セクションで基本文、つまり新しい学習事項があって、「聞いてみよう」、「言ってみよう」、「使ってみよう」、と複数の技能を使った活動をしてから本文をやり、最後に確認の意味で学習した事項を書いてみる、という展開になっていることが必要でしょう。

司会 新学習指導要領には、「文と文のつながりなどに注意して」とありますが、それは私どもの教科書では、どうい

うところで達成しようとしているのでしょうか。

久保野 ハロウィーンのような風習について説明した文章を例にとって考えてみましょう。文章を構成している文(sentence)の一つ一つに番号を付け、文と文がどのようにつながっているのかを分析します。

それを参考にして、今度は、別の風習、例えば日本の伝統行事を英語で説明した文章が、一文ずつバラバラにシャッフルされたものを読み、文章の流れを考えながら元の文章に復元していきます。そして、完成した文章を音読して、ノートに書いてみます。次には、他の行事などについて、例を真似ながら自分で書いていくことにつなげます。

このような活動では、「文と文のつながり」について、「読むこと」と「書くこと」の両面から統合的に取り組むことになります。さらに、音読や暗唱を通して、「話すこと」にもつながって行くのです。

中嶋 それは今までの教科書では出ていなかったのですか。

北原 なかったですね。

久保野 国立教育政策研究所が10年近く前に「教育課程実施状況調査」というものを行いました。全国から無作為に数万人の生徒を抽出して調査したのですが、「『私の宝物』というスピーチの原稿を3～5文で書きなさい」という問題がありました。

このような、いわゆるテーマ作文の正答率はお世辞にも高いものではありませんでした。新学習指導要領で「文と文のつながり」というコンセプトが出てきたのは、この調査結果を分析したのが基になっているようです。ですから、「つながりのよい文章を書く」トレーニングが無理なく盛り込まれている教科書でなくては困るのです。

司会 文と文のつながりのほかに、文章全体の構成も学習できるようになっている必要がありますね。

新里 この教科書には、1年次から自己紹介などの、スピーチの原稿を考える教材を置いています。まずは何を書くかを考えさせて、一つ一つの文を作らせます。その後で、作られた各文をどのような順序で並べるかを考えてみなさい、というようになっています。スピーチ全体の構成を日本語でもいいから考えさせてもよいと思います。「まず、自分の言いたいことは何だろう?」「それを君はどういう順序で言うかと効果的だと思う?」というふうに詰めていくわけです。

こういう教材が1年から3年までに数個ずつでもあれば、文と文のつながり、文章の構成・内容を意識して読んだり、書いたり、聞いたり、話したりする訓練になると思います

ね。

中嶋 現場で足りないのは、文と文をつなげる指導、構成や内容を考えるという指導です。マッピング等で構想を練る訓練をすれば、4技能の統合的な活動にもつながります。そのような思考トレーニングとタスク活動をリンクさせ、3年間を通して、一貫して筋が通った活動になっているのが、この教科書の特徴ですね。

2年前、最初の企画会議で、4人でホワイトボードにマッピングをしながら、3年間の9つのタスクを考えましたが、ちょうど、竹が強いのは節があるからで、その節の部分を9つ作ったようなものだと思います。

北原 文章全体の構成に目を向けさせることは1年からやらないといけません。例えば、文章を「導入」、「本文」、「まとめ」の3つの要素で考えさせるとか。そのためには、教科書でそれができるようになっている必要があります。**司会** 現場の先生方には、そのようになっていると非常に教えやすいと言われます。つまり、モデルがあって、その構成を分析して、その要素を書き出して、それを選んで、自分の文を書くところまでもっていくように道筋を作ってやれるということ。

中嶋 何か活動させるときには、モデルがいくつかないと、いいものはでてこないですね。自由に考えなさいといっても、やったことのないことはイメージできない。先輩のスピーチビデオや他のクラスの生徒の作品を見ると、なるほど、こうすればいいのかという見通しが立ちます。途端に意欲が生まれてきますね。

北原 教科書には限られたモデルしか載せられないので指導書に10も20もモデルを載せたいですね。生徒の作品もたくさん載せたいです。もちろん、間違いはあるだろうが。**久保野** 実際の生徒達が書いたものならば、難しすぎないので手が届きやすいかもしれませんね。生徒達が言いたかったのに、うまく言えないことなども分かるかもしれません。

司会 4技能の総合的な、統合的な学習というお話はだいぶいただきましたが、先ほど中嶋先生がおっしゃった個別の技能ができないと、というお話がありましたが、教科書でもやはり1つの技能にウエイトを置いた教材というの必要ですね。

中嶋 そうですね。「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」に特化した教材は必要だと思います。そこで、きちんと指導しておくことです。ただ、listeningの教材は、最後までずっとlisteningだけさせるというのではなく、イ

ンタビューをマッピングでメモをとり、さらに知りたい情報を質問して引きだすとか、メモしたことを友だちと交換して、よりよいメモのとり方を話し合うとか、だんだんと変化を加えていきたいですね。writingなら、書いたことを発表するなどspeakingにも結びつけるというようにして、複数の技能を組み合わせる活動できるようにしていくことが必要ですよ。この教科書を使っていたら、そのコツが見えてくると思いますよ。

北原 総合的な活動として、すごいですよね。

週4時間になって教科書はどうなる?

司会 新しい教科書の使用が開始される平成24年度からは授業時間が週4時間になるわけですが、そのことと教科書との関係はどうですか。

新里 現場の先生方からは、今の教科書は3時間でやっているが、それを4時間かけて教えられたらもっといろいろな指導ができる、と聞いています。この教科書では、指導項目はあまり増やさないで、むしろ実際に英語を豊かに使う活動を増やしていきましょう、という基本コンセプトで4時間に対応しています。

週4時間になるのは、20年ぶりぐらいですが、今回はほかの科目よりも時間が一番多くなっていますね。4時間になっても英語教育の効果はないと言われると、また3時間に減るようになるかもしれません。そうならないようにしたいですね。

そういうことですから、先ほどから出ているように、4技能を総合的に指導できる教材とか、1つの技能にウエイトを置きつつ、学習が進むに従って複数の技能をからめた活動ができるように仕組んだ教材を充実させる一方で、それらを除いた、いわゆる基本文のある本課の部分はほとんど増えていない教科書になっていますね。文法項目は増えていないわけですから。

司会 確かに基本文を扱っているページ数はほとんど増えていないですね。増えているのは言語活動、練習のページです。本文自体の分量も、それほど増えていないです。

北原 1セクションの新語数も最大8語を目安にしましたよね。

教師・授業はどう変わればよいか

司会 つまり、水増し状態になってはいけないということですよ。

新里 水増ししていない教科書、増やしたのは言語活動ですよ、ということは大きくキャンペーンを張ってもいいくらいです。

中嶋 まさしくそうですよ。

久保野 週3時間では、教科書を進めるだけで手一杯だったかもしれません。説明してドリルを行うだけで時間切れとなり、言語活動を行う余裕がなかった。しかし、新しい教科書では本文の分量は基本的に増えていない代わりに「使いながら身につけていく」ための活動が大幅に拡充されていますからね。

何度も繰り返して言いますが、**学期末手前の言語活動のMy Project** ページに向けて、活動を積み上げていくように構成されているので、是非とも活用していただきたいところですよ。

中嶋 学期末というところが、ポイントになりますよね。スピーキングやライティングなどの評価にも使えるようにしてありますよ。ほら、学期末テストの1つ手前にやれるようにしてありますよ、ということですね。

北原 教科書を使った典型的な指導案を、まず用意する必要がありますね。スピーキングテストをするということを織り込んだものを。

久保野 1時間の授業案だけでなく、年間指導計画の場合の推奨例も作りたいですね。到達目標として設定した言語活動と、その具体的な評価も含めて。

北原 そうですよ。評価も。

久保野 「観点別評価規準」の改訂版が、国立教育政策研究所のホームページに出ていますね。それに基づいて定期試験の改善方法などにも踏み込んでみたいですね。

中嶋 この教科書を丁寧にやっければ、どんな力がつくのか、それは何のためか、評価はどうするか、ということ意識していただけるようになると思います。ただ、その具体例を指導案や育成計画で示さないと、今までどおり、教えたところまでをテストする、ということになってしまうような気がします。

新里 この教科書を使ったら、教えて終わりということにならない、ということですね。

北原 編集の流れがあるでしょう。1年生の第1課からの。そこに、評価関係、テスト関係を差し込んでいけばいいの

ですよ。

司会 どういう評価を入れていくか、ということですね。

北原 例えば、1年生のこの時期には、音読テストをやったほうがいいよとかいうことを入れたほうがいいですよ。

久保野 そのような活動のヒントが、新しい教科書には満載なんです。ですから、パフォーマンステストは作りやすいはずですよ。



新里 今のは、実際に先生方が1年間の流れを考えるための教科書会社としてのサービスですよ。そうではなくて、それ以前の問題として、1時間増えるのを無駄に使う教科書ではありませんよ、むしろ、具体的にはこのような活動を行うためにプラス1時間を生かしている教科書ですよ、ということが重要だと思うんです。

こういうことを、文部科学省も一般論として言っただけだと思います。1時間増えたのは、ただ、ゆったりやっただけという意味じゃなく、もっと定着につなげるために、実際に使ってみる時間が用意されたと解釈してください、とね。

久保野 解説中心の授業しかしてこなかった人たちは、授業のパラダイムシフトが要求されますね。

北原 でも、教科書に出ている順に教えればよいようになっているので、楽にこなせますよ。

中嶋 この教科書を使うと授業が活性化するのはです。そのとおりに英語で進めていけば、教師の英語力も高まります。

久保野 教師としての英語力ですね。教室の隅々まで、マイクなしで明瞭な発音を響かせるような。英語力があって話すのが得意だとしても、日常会話を早口でペラペラ喋るようなやり方ではダメです。

北原 英語力があると言うけれども、本当にそうとは思えないんですよ。要するに、難しいことは言えるかもしれな

いけれども、それをやさしい表現で言えるかということなんです。

久保野 「生徒が分かる英語で」というのは、高校の指導要領でも強調されていましたよね。教室で使う英語の語彙や文構造を、相手に合わせて臨機応変にコントロールする必要がありますから。

新里 英語の難易レベルをコントロールできるというのが、本当に英語ができるってことなんですよ。

久保野 自分が使える英語をそのまましゃべっているだけでは、教育的な配慮が足りないんですよ。

中嶋 子どもたちが、どんな言語材料を習ってきていて、それをどう使えば分かりやすくなるかという発想が必要なんです。大学の学生たちも、英語科教育法で模擬授業をするときに、自分たちがよく使う単語をしゃべってしまいます。生徒たちは、言っていることが分からなければ、関心なんかもてません。

TOEICが満点で、英検1級をもっている私の友人は、中学校の教科書の本文がすべての土台になると言っています。コントロールするとは、まさに、子どもたちが習った単語や文法を使って、彼らが分かるようにteacher talkが自在にできること、コンテンツもワクワクするものにできるということですよ。

新里 子どものレベルに合わせないと、授業にはならないですよ。

北原 1つのことを、1つの表現方法でしか言えないんですよ。

中嶋 それは、コミュニケーション能力が高いとは言えないですよ。相手に伝わらなければね。

久保野 高校の先生たちの中には、英語は上手だけれどコントロールに不慣れな人も多いようですね。

中嶋 授業マネジメント力は、特に大事ですよ。

久保野 英語教員として最低限必要な運用力はクリアしたんですよ。その際、文部科学省が作成して全校に配布した授業DVDも参考になるかもしれませんね。

北原 例えば、アジアの人たちに英語で説明しなければならないような場合、伝わらないと意味がないですから、相手の英語に対応しなければならないわけですね。ネイティブに近い話し方ができるだけでは、もうあまり意味がないということですよ。

新里 そうですね。それを私も言いたいです。だから、ネイティブに近いレベルでしゃべれるということが、本当に教師としての英語力があるのかどうかは分からないですよ。

司会 総合と統合などについては、大体こんなところでいいでしょうか。では、基本本文とか目標文とか言われるものの提示のしかたについて、新しい教科書ではどんな点が特長でしょうか。

基本本文のあり方

中嶋 基本本文というのは、自然な文脈や場面の中で提示するものだと思います。ことばは場面でしか意味をもちません。ことばが使われる必然性がなければ、単なる文法の知識で終わります。今までの教科書が、その場면을きちんと与えていたかと言うと、決してそうではなかったように思います。教科書の本文から取り出した基本本文は、子どもたちが実感できないようなものであり、それがそのまま載っていたこともあったわけです。そこで、今回の教科書では、どんな子でも、ニュアンスが理解できるような自然な場面設定を考えました。できれば、2往復ぐらいするようになり取りの中で、使い方をしっかりと理解させましょう、さらに、最低でもそこだけはしっかりと覚えさせましょうという趣旨で考えたわけです。相当、時間がかかりましたね。何度も何度もやり直しましたから。

司会 1年では無理としても、2年、3年では2往復のやり取り、つまり4行にしたことで、しっかりとことばを使う場面が出せますね。

北原 基本本文が4行になっていけば、本文全体を何度も音読する時間がなくても、ベーシックなダイアログだけ音読して、これだけをきちんと頭の中に残しておけば、かなりのものができるかもしれないですね。

新里 4行対話での基本本文を導入するときに、どんな扱い方が考えられますか。

北原 基本本文は原則として既習語で作ってあるんですよ。そうすると子どもの自立的な学習を促すために、「これはどんな場面だと思いますか」とか、「この2人はどんな関係だと思いますか」などの発問が可能なので、そのようにクイズ的に入っていくとおもしろい授業ができると思いますね。いきなり、これはこうだ、という説明はしないほうがいいと思いますね。

中嶋 そういう、ニュアンスに気づけるような教師の発問例を指導書にも書いておくといいと思います。多くの先生方は、基本本文を板書して、それを説明するという指導をしておられますから、クイズのような発問を考えるのは不慣れです。ただ、やり方が分かってくると、自分なりにどんな場面かを気づかせようと工夫されるようになると思いま

すよ。

3年間が見通せる教科書

司会 基本本文における目標ははっきりしていますが、教科書のそのほかのページも、と言いますか毎時間の授業でももちろん目標は必要ですね。そのあたり、教科書との関係でお話しいただけますか。

中嶋 現場では、入試に間に合うように、教科書を先に進めていくという指導が非常に多いと思います。しかし、そうではなく、英語を使って何ができるようにするのか、どう自信をもたせるのか、3年生の3学期には具体的に何ができるようにすればいいのか。「聞く」「話す」「読む」「書く」をどこまでできるようにして卒業させるのか。そこから逆算して指導をしないといけないということを、私たちはこの教科書作りを通して提案しているわけです。

新里 中学校英語教育の最終の到達目標から逆算して、各学年の終わりにはどんなことができるようになっていくかを決めていく。その各学年の到達目標を達成するためには、各学期でどのような目標を設定するかを考える。さらに、学期の目標を達成するために、毎課や毎時間にどのような学習目標を設定するかが決まる。このように教科書は組織されている必要があります。

この教科書では、毎時間の基本本文、本文、それが3つ集まって各課がありますね。そして、いくつかの課を合わせてまとまった言語活動をさせる **My Project** を学期末近くに置き、3年間では9つのまとまった言語活動ができますよね。それに各教材の関連が分かるように教科書の紙面上に示してあるということです。

北原 ひとこと言えば、今やっていることが何のためにやっているのかがわかる教科書ということですね。

中嶋 一部の先生方は、今回の教科書の左側のページの活動がていねいすぎるのではないかと心配されていますが、むしろ、既習事項への渡りにつけられており、学習者が探して確認するという作業をとおして、自ら気づけるように、緻密にデザインされた教科書と言えるのではないかと思います。

新里先生がおっしゃった9つのまとまった言語活動のことですが、3年間で出ている9つがどうつながっているのか、ということ、ちょうど、ビジネスにおける「見える化」のように、つながりが一目で分かるように相関図にしておきたいですね。

音読を促す教科書

司会 次に、英語学習における音読の効果はずいぶん前から言われていますが、教科書では音読をどのように扱っているのがよいですか。

北原 教科書に具体的に指示があったほうがいいですよ。音読したら、回数を記録できるようにアイコンを置くとか。

中嶋 例えば5回音読したらアイコンにチェックマークを入れるとか、色を塗るとか。

久保野 そのような工夫を指導書にも具体的に書いておいた方がよいかも知れませんね。

新里 音読は中学生の英語学習でも相当な効果があるのですね。

北原 やってみて、評定が3の、真ん中あたりの生徒が、5回×音読アイコン5個の25回読んでくると、教科書の本文は全部頭に入ると思います。これは事実ですね。

久保野 確かに練習量を増やすことは大切です。そして、もう一つ忘れてはならないのが、1回1回の音読練習の質を高めていくということです。音読活動の質は、教員の指導力によって大きな差が出るように思います。「音読の声が出ない」という授業には、必ず何か問題点があるのです。**中嶋** 音読のさせ方も絶対教えないといけないですね。要するに、内容を理解した上で音読しないとなんにもならない。

久保野 ただ繰り返していても上手にならないし、力にもなりません。また、音読のスピードを競わせたりする場面を目にすることがありますが、気になりますね。

北原 1分間に何回読むとかね。よくないですね、あれは。頭の中に映像が浮かぶように音読しなさい、と言わないといけない。

久保野 同感です。音声と意味が直結しますからね。そのような音読は、聞いていて意味がよく伝わってきます。音声と意味が直結すれば、頭の中のイメージをダイレクトに英語に変換することにもつながっていくのですね。

小学校英語との接続

司会 小学校英語で学んできた生徒が、平成24年度版の教科書を使うわけですが、小学校の英語活動と中学校の教科書とのつながりという点について、いかがでしょうか。教科書編集の際、その点を先生方にはずいぶんと議論していたわけですが。

中嶋 今、中学校の捉え方は二つに分かれているように思

います。小学校でやったことを意味付けて、「小学校でこれを使ったでしょう、これはこういうことなんだよ」と言っている先生と、一方で、「小学校でやったのはお遊びだから、そんなのは忘れろ。中学校は高校入試があるからな」ということで、早速、文字指導から始めるという先生方もおられます。

だから、教科書が小学校からのつながりという点で導入部分に何をもってきているかは、中学校の先生方にとっては非常に関心のあるところでしょうね。

司会 小学校の英語活動はお遊びみたいなものだからという先生がおられるんですね。

中嶋 残念ながら、そうですね。専門性ということが気になり、間違いを覚えてきたらたまらない、発音は変な癖がついたらなかなか直せない、ということに心配されます。でも、小学校の先生方は、体当たりで、楽しくなるようにいろいろ工夫しておられます。ですから、中学校の教科書の入門期でも、ちゃんと小学校でやってきたことをうまくつなげてありますよ、という具体を示すことですよ。

新里 “Hello.”をはじめとするあいさつの表現は小学校でずいぶんやってきているので、それを思い出させることから入っていく。小学校で音としては活動の中で何度も聞いたり、言ったりした単語をイラストとともに聞かせたり、言わせたりするページを何ページか導入部に置く。このようにすることで、生徒はスムーズに中学校英語に入っていくことができる。それと文字を導入することを従来以上にていねいに扱う。基本的には、そういうことだと思いますね。

司会 いま新里先生が言われたことに尽きると思いますが、もうひとつ1年の教科書の作り方が、最初のほうでは、小学校英語でやった、IとYouを中心にした世界をまず扱っていますし、1学期の大半がそれに近いので、その点でも小学校からのつながりはスムーズだと言えます。

北原 文字の導入というところが一番大きいですね。1つの課をそれに充てるとか、文字と発音の関係、つまりフォニックスもきちんと扱っているとか。

教科書の題材

司会 題材の扱いについてお願いします。

新里 これまではわりと環境問題が多かったと思いますが、今回はどうですかね。

司会 「発信」ということを柱のひとつにしているの、日本の伝統文化を発信する題材が多いです。

新里 伝統文化が発信につながるんですか。

司会 日本文化の発信です。折り紙とか新年の話とか。2年では枯山水とか花見とかを扱っていますし、3年では風呂敷とか提灯をどう説明するかということを取り上げています。

新里 枯山水や花見など日本の伝統文化を、違う文化を持つ人たちに紹介することも発信ですが、もう少し日常生活レベルの発信もしたいと思うんです。とって付けたような、ビッグカルチャーというのは日常的なものではないですね。

司会 学習指導要領の教材選定の観点の柱の1つとして、伝統文化というのがありますね。3年だと、世界遺産のところに行ったり、回転寿司の起源とかを扱っています。

新里 回転寿司はいいですね。日本古来の事物の紹介とか、日本の年中行事や祭りの紹介とか、茶道とかも扱っていますよね。

司会 京都の裏千家にまで取材しに行ってきましたよ。日本の英語教育というのは、戦後、アメリカの英語や文化を受け身的に学ぶことが教科としての英語だったんですよ。それが、やっと、日本のことを外に発信すること自体が必要なんだというふうに変わってきたのかなということですよ。これは、世の中の変化なんじゃないですか。

ビッグカルチャーとスモールカルチャー

新里 日本の伝統文化を扱えと学習指導要領に書いてあるから、それはそれでいいんですが、よく言われるビッグカルチャーとスモールカルチャーのことは意識したいと思います。歌舞伎を扱うとか、日本の伝統芸能を扱うとか、そういうものを紹介する場面というのはあまり日常的ではありません。いわばビッグカルチャーです。例えば、日本の子どもたちが海外にホームステイに行ったら歌舞伎のことを説明することはあまりないと思うんです。

司会 それよりも、もっと身近なカルチャーのほうがいいということですね。

新里 身近なカルチャー、つまり、スモールカルチャーを扱うという意味では、風呂敷はいいと思います。ただし、ビッグカルチャーも必要ですがね。

中嶋 そういう意味では、剣玉の説明の仕方から入っていくというのはいいですね。剣玉、折り紙、回転寿司といった素材は、確かに生徒にとって身近だと言えますね。

■ 身近なことを発信する

司会 異文化理解というのは、どちらかという、受け身的になる面が多いので、それも大事なことですが、もうちょっと、4時間になったということで、自分たちのこと、身の回りのことから、日本のことを紹介していけるということになったと思います。

新里 そういうことははっきりとアピールしてよいと思います。子どもたちにとって日常的な文化を発信する教科書だってことですね。

司会 アピールすることは必要ですね。

北原 発信できる内容があることが必要であって、それを探するために全国の高校入試問題を掲載した分厚い本がありますが、それに全部目を通したんです。

そうすると、それぞれの県の独自のお祭りだとか、文化が出ていて、それがすごく増えているということが分かったんです。

久保野 新しい教科書にある「あなたの地域のお祭りや行事などを紹介しよう」というページは、高校受験にも役立つそうですね。

北原 県立高校入試の問題自体がそうになっているんですよ。中嶋 私も、県立高校の入試問題作成にかかわっていたときに、地域を意識した問題をあれこれ考えました。ただ、他県からの受験生のことも考えなければならなかったので、問い方には配慮しましたね。

司会 身近なことといえば、1年から3年を通じて学期に1つ配置している4技能統合型の言語活動My Projectがありますね、その3年の最後が自己PRを作って発表する活動になっているのは示唆的だと思います。従来は大体の教科書がディベートとかで終わっていたんですね。

しかし、そうじゃなく、自分に戻るといことなんですよ。自己紹介に始まって、自己紹介で終わるといことがミソなんですね。

■ 自己紹介がスパイラルに回って自己PRへ

久保野 自己紹介がスパイラルに回っていくのですよね。1年生は1年生なりに、3年生は3年生なりに、学年に応じて自分のことを発信して相手に分かってもらう力を、着実に付けさせていきたいですね。

新里 今のキーフレーズの「自己紹介がスパイラルに回っていく」というのはいい言葉ですね。

北原 うちの学校の子どもたちも、3年生の最後は、自己

PRというか将来の夢とかを書いて卒業していくんですよ。

中嶋 私が10年間取り組んできたハードカバーの卒業文集作りもそうでしたね。3年間学んできたことを駆使して、最後に精いっぱい自分の考え、自分のことを自己アピールしてみる。基本的には、中1で始まった自己紹介が、いろんなことを学んでバージョンアップされた自己紹介となって帰結する。それをきちんとした形に残すことで、こだわりも生まれましたね。

久保野 3年生の最後にある自己PR活動は、学者が机上の空想で作ったものではありません。中学校の授業を実際に行う中で、試行錯誤を通して鍛えられ磨かれてきた活動です。現場での実践という、ある意味での品質保証書の付いた活動だとも言えます。

新里 自分たちの学校を紹介するホームページを作る言語活動なども一種の自己PRですね。

そうすると、題材については大体話が出ましたね。生徒、子どもたちにとって日常的で身近なもの、それから伝統文化やそれに関連して地域の話題なども。それら発信していこうということも。

司会 あと、読んだことについて、いろいろな活動をさせるという面で、中嶋先生、文章を書かせたり、詩を書かせたりとか、いろいろなことをなさっていますが、題材の子どもたちに与える感動というものが、学習意欲をかきたてるものでしょうね。

中嶋 そうですね。まず、子どもたちが心を動かすのは、本当に崇高なもの、今まで自分が知らなかったこと、心が動く教材、身近なもの、外国の子どもたちの暮らし、学校の文化、授業とかについても興味を持ちますね。ですから、身の回りのことをどんどん発信していくというのは、大切なことだと思いますよ。

司会 それと、時々言われる教科横断的な題材もあります。英語で数学とか理科とか。また、料理のレシピ、これは家庭科ですかね。また茶道などの伝統文化も。

中嶋 理科とか数学の得意な子どもの出番だと思いますね。英語が苦手な子の目がキラッと光ったりして。

■ 高校入試対策は？

司会 これは題材の内容ではありませんが、高校入試の長文問題対策の観点から現場の先生方に聞かれることが時々あります。

新里 各学年の巻末に本課で扱った題材について更に深く掘り下げた読み物とか、入試の語数を意識したような発展

的な読み物があればいいわけですよ。

司会 全国の高校入試長文問題の語数を調べてみましたが、相当ばらつきはあるものの、大体400から500語程度がかなりありました。

中嶋 600語のものもありました。

久保野 3年後半では、そのような数字も意識して、長い文章を読み通すようなプログラムも用意してあります。

中嶋 入試との関係で、3年では速く読むことも要求されるわけです。

北原 うちの2年生は1分間に160語から170語のスピードで読みますよ。

中嶋 それはすごいですね。北原先生の確かな音読指導が、結果として、速読にもつながっているということが分かりますね。

■ 辞書指導

司会 それから、今度、新しい学習指導要領で、辞書指導もしなさいと、はっきり出てきていますが、新しい教科書では北原先生に辞書指導のページをご担当していただきましたが。

北原 2,3年のものも私が原案を示しました。

司会 先生にご提案いただいた全体配置に沿って作ってあります。

北原 この前、関東甲信ブロックの東京大会で、新しい学習指導要領のキーワードによって分けた分科会が5つあったのですが、一番人気のあったのは「総合的、統合的」に関する分科会で、一番人気のなかったのが辞書指導でした。

中嶋 先生方の中には、安易な発想があるんじゃないでしょうか。辞書というのは、調べ方を教えれば、それでいいんだという。だから、辞書指導ぐらいは、何とか生徒が自分でできるというように思い込んでいて、今回の目玉である統合や総合というところに流れて行ってしまったのじゃないかとも考えられますよ。

北原 そうすると、実際に辞書指導はやっているということですか。

中嶋 そうですね。一応、さわりだけを指導しておくというレベルだと思いますが。でも、それでは自律的学習者は育たない、自学自習にはつながりません。それこそ、この教科書で正しい辞書指導の仕方をきちんと啓発できればいいと思いますね。

北原 1年では辞書指導のページはもちろんありますが、読み物のページで辞書を調べたり、おそらく生徒の予想と

違う意味を持つと思われる単語を調べたりさせるような具体的な指示を要所要所に入れました。

■ 写真やイラスト

北原 あと、写真とかイラストなどのビジュアルなものも教科書では大事ですよ。今度の教科書にはいろいろとおもしろい写真というか、よくこういう写真を見つけてくるよねというのがありますね。回転寿司の寿司トレインとか。

司会 これは外国で撮影してもらったんですよ。

北原 こういうのはいいですね。

久保野 写真の下に説明があるものとないものがありますが、何か理由があるのでしょうか。

司会 わかりにくそうなどころには入れたつもりですが、一目瞭然のものや本文そのものが写真の説明になっているものは入っていません。

久保野 地図なども見やすく、分かりやすいものになっていますね。

司会 これまでのお話で、本日のテーマはほぼ出していたようにですので、新里先生、最後にまとめていただけますか。

新里 われわれの新しい教科書について、表現が抽象的になるかもしれませんが、特長としては次のように言うことができるかもしれません。

1つは、練習と実際のコミュニケーション活動のバランスがよく取れた教科書だということ。つまり、率直に言って、英語は練習の部分もきちんとしなければならぬし、当然、コミュニケーションのために実際に使わせないとけない。その2つのバランスがよいということです。

2つには、1つのセクション、それから1つのレッスン、数課学習したあとのまとまったコミュニケーション活動、更には学年間、それぞれの相互関連が学習の目標の面でも、言語材料の面でも1つのまとまりとして構築された、すぐれた教科書である、と言えると思います。

3つ目には、最終的にはコミュニケーション活動で使わせながら定着を図るということですが、指導・学習の流れが非常に、ある意味では常識的な、ベーシックな流れになっている。また、ていねいにステップを踏んでもいるので、指導経験の浅い先生にも教科書の順序に沿って指導していただければ成果の得られる教科書とすることができると思います。

司会 先生方、本日は長時間にわたってたいへんありがとうございました。(了)

大学院における教員養成

大学院1年次後期の授業の一環として、昨年11月から12月にかけて、岡山県立倉敷南高等学校で、3人の先生の授業を見せていただいた上に、学生が2時間授業をさせていただいた。SELHiからの付き合いとは言え、終了後も快く引き受けて下さり、しかも、お忙しい中、授業後も学生の質問に答えたり、学生の授業にコメントしていただきたりするのは、とても有り難い。

何より感心するのは、SELHiの研究開発課題として取り組まれ、成果を上げられた複数の技能を統合した活動、例えば、教科書本文の読解によるマッピングから本文のプロダクション、本文のサマリーを用いてのディクトグロス、サマリーやオリジナルと本文の表現との比較対照などが、研究期間終了後も継承されている点である。

大学院1年次には、定員5名のところ今年度は10名在籍している。8名の日本人学生に加えて、大学間交流プログラムによる東北師範大学からの留学生が2名いる。高等学校の教員志望者も多く、附属中学校がありながら、大学から離れてはいるが、教育現場の勉強をさせていただくのに理想的な学校として無理をお願いしている。

大学院のこの授業科目は、高度専門職業人の養成を目指して、平成20年度のカリキュラム改革によって新設されたものであるが、教育の現場において、大学での講義を通して得た知識や技能を使って、英語指導改善に関する小規模なプロジェクトを立案、実行することができる力を培うことを目的としている。

大学での講義では、高等学校における英語教育の課題(例えば、文法翻訳式教授法からの脱却)、英語学習・指導において重要なこと(例えば、多様なインプット処理活動、インプットに基づくアウトプット産出活動)などについて学んだ上で、担当予定の課の教材研究を行い準備した。

学校では、授業を3つ見せていただくことにより、先生によって違いはあるものの、共通に取り組まれていることは何なのかを理解した上で、自分たちで工夫できる点は何かを大学に戻って考えるという手順を踏んだ。

担当させていただく授業は、1年生の2クラスで1コマずつ、異なる本文セクションでの1時間目の授業であった。1つの授業を、ウォームアップ(6分)、理解活動(20分)、産出活動(20分)の3パートに分け、各パートを2人の学生が担当することにした。

ペア組みから、どのような活動を行うのか、どのように分担するのかなど、無数とも思える決定すべき事項を前に愕然としながらも、ペアで何度も考えた上で、活動検討会においてみんなで議論し修正するという作業を繰り返し、学生ともども悪戦苦闘の毎日となった。

授業は最終的に次のような形になった。ウォームアップでは、留学生の出身地「内モンゴル」の写真をプロジェクターで投影しながら、満天の星の写真も教室の電灯を消さないと見えないことから、うまく「光害」に関する本文に繋げた。理解の活動としては、本文のチャンク・リスニング、スラッシュを入れながらのリピート、書き換え文によるtrue or false、産出の活動としては、チャンクごとの日本語から英語への口頭翻訳、本文のパラフレーズ、読解によるマッピングからセクションを1文で要約するサマリー作成などを行った。

授業づくりを通して改めて認識したことは、インプット処理活動の重要性である。生徒さんはしっかりと予習してきているが、それでも、音読、read and look upなどインプットを取り込む作業が十分でないと、本文に基づく産出活動でさえうまくできないという当たり前のことであった。

この学生達も2年次になれば、多くは、残念ながら採用試験と修士論文の準備のために、現場の授業から離れてしまう。専門職学位課程の教職大学院ができてから、既存の修士課程は研究者養成という役割の強化を求められているのかも知れないが、実は殆どの大学の教育学研究科は本来、高度専門職業人養成の教職大学院でなければならなかったのだとつくづく思う今日このごろである。

(岡山大学大学院教育学研究科教授 高塚 成信)

投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起、実践報告、研究などの投稿をお待ちしております。締切は特にありませんが、本誌は今後、2011年9月に発行の予定です。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

- ① 22字詰×72行以内(本文分量)
- ② 二重投稿はご遠慮ください。
- ③ 採用分には薄謝を進呈いたします。